



中村俊定文庫
文庫 18
182
3



晋
十七回

万里行

享保八



晋子^の像ハ
此^の子^のあ^の林^のて

志^の心^のり^の学^の又^の存^の子^の哉

露沾

引^の立^のら^の水^の 新^のハ^の早^の蕨

立圃

志^の心^のの^の子^の柄^のも^の女^の子^の技^の折^の一^のて

江戸

琴風

路^の 崎^の 群^の 此^の 生^の 々^の 起^の 引^の 々

沾

石^の子^の独^の居^のハ^の子^の糸^のの^のら^の女^の乃^の月

野渡

薄^の乃^の梯^のハ^の時^のく^のの^の風

沼薄



年うふれハ木綿一棧ハあり 芳津

糸此糸いとハこほ月繩簾ハ 執筆

そい俺おれも玄徳此宵の程 立圃

下くだり子此沙汰板いた也や 露沾

奔走の袴はかまもききとあ道 沾梅

施ほり二粒にりゅう情なさけハ中啓 琴凡

ささらうふき掃蕪の夕日 雨の跡 沾唐

虫むしハ立たりとも子こ棧せきハ織オリ切 野渡

落おち初はじて要砂ようさヤやきハカかを細こメ 芳津

更さらても清きよ一月いちげつ此こ斤しん粉こな 立圃

東あづまももぬぬもも却かへりり也やの主 琴凡

十 蝶ちょう子こ吸すりり也や商人しやうじん此こ業わざ 沾梅

夕ゆふ霞かすみ土つち凡たゞ小舟こぶねの遠とほ渚しづ 露沾

流ながりももうう行ゆきき堂どうのの影かげ 沾

恙や糝せんつつてて熟じやくハハアアそそるる國くにハ 野渡

孔くわん雀せつの尾おしああくくおおくく戯あそを 芳津

志し〜とまた結まぬ入栞乃内 立圃

都子取ぬも此く〜 琴凡

毛煙〜さるるが折込〜 沾梅

尖頭弁ハ一流の軸 露沾

冷水此涉暑と知て下向道 沾博

結納の後踊らせぬさる 野渡

月君子屋敷なれは〜定付け〜 芥津

他の地の汐も〜さるる波 立圃

彩彩と信強〜 焚海山 琴凡

〜乃ハ下巻 沾梅

桃灯〜輪帽子文〜 露沾

矮雞ハ包〜 松塔 沾博

二見〜河の自由を此昼 野渡

梅の標〜 芥津

懐舊 自江府到来白々

とほる成美三月下の八日沽河と云りて
沽徳屋の度のをと破る其角すまゝに
句を吐きと目えりかたれり日
あきしむる終り終
居あつた向あつた山さく
古き友もあつた
こゝ世人の心は
ひらひらと風儀あり
まゝに沽河風系
口もやうに
城の宝井の
止るまゝ世の
まゝらと今
十七回
新

狂るるりこもと拾ひ
あり 其角 不卜 一桃 狭水 扇雪
琴風 五人のふ
焦尾吟は三吟あり 中角 桃子 琴風
二人のふ
三吟あり 其角 昌貞 琴風 二人のふ
揮ひ墨研は力たす 唯作
を嘆面也

女薩祭

琴風

なつり や身ひらり
山操

紅葉の誰か
けり月夜

ふ川かき人をか
百里

晋子一周祥よとるも其のまねりて
師法を遊せし編集の時余去夏
より縁ありて晋麻比古慶七の壽
落一十七年乃双丸ほくと益子授
玉のこころも玉のこころと云及
のこころも京師より懐旧の句を
新故云

晋のぬむしりぬ其の日本日あり
高南時乃はまふ

晋のぬむしりぬ其の日本日あり
高南時乃はまふ

四天王も再無比やさの秋
秋色

今ハ世はまじきまじきや差れ梅
序令

古人晋子よゆうすこころ今世の
追をそと感ん

彼子の一門はー世界を 我足

花はあまのりとも句をとりて

あう行や二月のまね新ハ
巴人

師ハ針を流せまよいと新ハ
雁山

またしのひらかうらや世の
素丸

志ぬ新まよふと負ハ
鯉尺

美何雨や中流にまふり
晩生

雲とかりて空は法田の如く
うねねと空しきるるる

はげしき花をあらはしや蛙の子 好新

人丸十年は笑ふ昔よけと のまこ

遊覧の舟にそよよの音 蔽牛

比やのつるさるるを祈りて袋 仙里

花も今風雅にわびて茶の食 風茶

一むろりや日坐ぬれ 梨乃雞 栢十

縁伸よつちの 古もを柳吟 園女

歌仙

江府

ぬすてハ梅の聖燕乃浮世 長水

野もあねねを落れ東漸 巴人

かきまはるむい 男と又垂し 糸見

や川に人ゆりて人 蔽牛

喜日も九月の月此かきむら 雁山

尾毛よからむ 帆ハ走る雲 狛等

穀売よ玉子十法、秋満り 素丸

かすももも後磨坐ス 長水

あみして風もゆるぬあえ屋い 巴人

あまらまゝし垣の垣細 藤兄

神主のこゑもさハ猿あうゆで 蔽牛

一川引出し人の袖入を 素丸

小車と鈴のそそ押ス 田植者 雁山

月下にたれかこもくしん 巴人

関ち乃秋よとらぬ只の波や 長水

井戸くくくぬ草袴袴 蔽牛

温泉のりりそふと花の多 素丸

二
しきハ弥生のそぬくり 雁山

竹本ハ猫の妻戸よをすそ 巴人

手代十人指けらそや 長水

弱ふとき先帯紋乃とけやまき 蔽牛

色い旅りけて雪隠のま 素丸

菊好の鼻此新き風此末 藤兄

筑の常々何の紫もす 雁山

昔侍より狸の出さかりきり 素丸

緑もくろくと漆る丸紫 巴人

あは面うていぢまや固あうは 七水

とつ、ほ肉の様よひされ 糸見

あんとんを人よんせまやほのあ 雁山

揺志ほきくちろき月 蔽牛

う 雪りめ海ふるまとしてちりせ 糸見

るる驚るぬ支離秋はて 素丸

神風乃二三石本風車 七水

くくくくやくくく印は昔縁 雁山

長生のうの親言し花のま 巴人

そこの戸れをきみ 蔽牛

題花巻

ア人とも此香ひ 配るやさすき 南桂

扶陽

江戸江鶴堂

輪邊にむすあや小燈の影 大津 松尺

人そそくはくみ風花を不薄 大津 寧陀

のりそめは枝多し落人ハ 大津 如柳

われもく免く角に花すき 大津 其滴

中くは雨落乃志く髪やを落 大津 夕松

道逢ふ灯此なけや志し落 大津 停牛

風りくるや角に文字やを不 大津 白鳳

一灯の影其その世にそ 大津 可謹

風月をよ解ふとなん 大津 言通

を落はく 大津 一鏡

又をいつ 大津 和木

若くは奥有いろや 大津 兔爪

妙典の 大津 魚江

爰 大津 雷之

志 大津 若木

絲 大津 芳水

長崎

一打

夏あつ子り雪とアツとする極成 吞江

幾と暮れ暮日と古 済し

車小屋実と沖もつろ人 全

知悉るふきりたきりり 吞江

有けり剃髪志ふ草花月 、

松梅の生ふも能^{ツキ}なりぬ 済し

志^ウ露^ウや八十末社つまぬ絵 、

入るあけふく品数を好む 吞江

うきうきを思ふ玉極ふ折幾い 、

花をものくら返るるもろり 淡、

田ふふあふと貴^{ツキ}山の下街あり 、

運あまはるるは後れ立針 吞江

あゝ何乃中納言とらす人 、

却麻しく舳^{ツキ}水豆する 淡し

うゝんや祿の年入る自在界 入

笠をさくくはせ中を吞江

孔林の葉のさき出し移ちく

ちハ霞く月かるる逢 淡い

懐旧

接陽

香我炷て猪乃瘦るや桃の一 芦水

入ル羽とすりく雲を出物 淡い

あな行候も雲雨まの月 禹人

竹もある種宿る腹 亀木

^{四景}地所一 去りる四季の風 一秋

何れもかぬ祀るる心 白水

対面は倚子刀掛ヶ野は鏡 水子

初燕以後は大喜ハ稀 懐古

楠ある中隈と云ふ鬼六

葉を量りし蜂の川吉 漢川

右故障ありて一階而已

四々四

木の弦を梅の香る甲

同

吐雲

池の扇をきくむき河を

淡

とらに桶竹紙の文も残らん

布門

耳のいろく奇麗なる者

汝篁

志のり萩の命の二朝の柱杖

且水

今も鞠はくわの銀河を

樵嵐

八月の常と縫うるかわにあり

千麻

梅の根を露もふ代あり

帆筆

釣ひき山も回きて對するよ

紫桂

僅醸していすかかうる

吐雲

出せよよそねこのき初も後

淡

方々にんを居て牡丹百日

布門

源大夫かきくん 粽 売

汝篁

傘柄の鴻のハ笑

且水

板蕨の家よ道に竹の中

樵嵐

中々々々入、疾く吸之陸 千麻

迎させん其のハキクキ実とわや 旦水

花もこのりり 確に雞 汝皇

す理を又造り教経に記けり色 吐雲

疎よりぬ帳よ去の月 樵嵐

阿つくとりふ然ゆけ此もほし 布門

尾上をもよる尉ハ指とり 旦水

鳥也乳の雲成りし〜新日親 千麻

香車とあ〜くもる雷 棠桂

夏いよ似て野亭千橘仕立物 汝皇

人よんせむやちかまとい 糖ヲキ 淡い

ん遠いせやうた〜やう鼻の穴 樵嵐

お〜なよ〜と横にま〜梅 布門

さ〜浪の二日乃湯衣あ〜定 吐雲

いと〜るん吟り小魚此志〜娘 千麻

登〜るよ〜起〜る 女お帝の徳 布門

仏の輪よこりりくの鳥

汝篁

足袋賣此背に羽の月此を

且水

漕つらんれと山屋の

樵嵐

いやくをねりし合を木樫樹

千麻

う
らげぬら作万里

吐雲

佛の此画や鳥もかき

汝篁

力一とい釘賣此段

布門

鄙の鳥帽子似あふ似合ぬ

樵嵐

廿敷くこと法き

千麻

懐よ紫の潭小眺灯

吐雲

灵宝上よ春ハ来ヨク

淡

月とらよ盛

紫桂

底の蔓を

燕

且水

ふれキ角をとるははと根と伴丹酒
とハ知人なりそふこれ任地今酒
の年よりしん人をも来はよこれ

そと名つや中一乃雲舟をそとすうさけ
足水

伊丹

又ぬ人も今るやうな縁月昔人

饅頭し人もあそ山さささささ
人ともあつたさささ

十七年饅頭黒黴一山さささ
春堂

雨の如くも其角々
長父

吾やむり一世間且小藪柑子
人角

ぬさささや雑談集を債神する
常舟

一ととと方巻を制して吾翁子叙句
今一に角と一や仔細の世と一乃巻
さささと歌と一ゆもをささ出作りさ

大坂

深川や芦北角と一と一
沼蓮

吸物車と一と一
淡々

年と一と一この縁物雨晴て
水喜

内より一と一階の窓
合翠

鈴は月右ハ孤舟は風北玉
竹人

浮き舟はし移りよあささ
真庭

い川^ウまゝを我今三原もき深き 白主

竹もあはれ瘦くも落 紹蓮

昼告る親女切ぬく廊下板 淡

鏡へもくく比叡の頂 水音

乃中みくく初蓑衣杖い子 合翠

銀を嘆六の あげりの 作人

ことくく唯今あゝあゝ 魚庭

ふハ瓔珞をけりて霍公 白主

せよわらるあゝ治のたね 水音

月一羽織り神ほ陶之 合翠

月をの十とそ大節もあわれ 魚庭

初雷より生蓮 吹 紹蓮

有職の空あはれ手 雛糸 作人

耳よりしてんくもあき 水音

但る糸のきりあき 燕衣 白主

同行四人 峰子 稗子 魚庭

巻下

生深もたけと十字街 詔蓮

夕ぐれ電きんきんきん者 竹人

種りけしんきん湖の春 含翠

かき毛 雪も毛ハ品くの雪 白主

新きんたれきん川ねる水 水音

美く見ゆらもアきんめん 詔蓮

今ぬきん月あり神きん 無庭

尾巻きんをきんのきん シテカサ 含翠

鳴きん麻の音よきん 頭痛持 白主

追きん一きん空を新きん 水音

古跡きんやときんあきん通きん 竹人

名きん去きん花きんのきん 無庭

すきんめきん花きんを 含翠

荊川きん連きん紙きん蝶きんのきん 淡と

題 概

栢陽

休のかりて其角さくく糸 布門

葦少くる場の極乃力全 蟻同

舟と過ふ早江鏡子や極花 全 三中

あこころれらしき武吉や初極 江 永兄

もあつと四句の偈談 山極 勢反 不音

うらとと彼名はくくれ夕日 若良小淡 和吟

いさくくや茶客の妙ハ吟ふ 河内 雲巢

四々四 独吟 賦春秋之季

幡那別府

あさくをりきと湖の肌 瓢水

鏡も浪も一くくくを

鮎信土中川岸の七巻

草年のまよおふ 姐

回入る町乃櫻子岸の葉

まふく成結る川 福

の月定くる後子奥の五巻の月

茶の履下駄より茗荷草狩
う

もくもき山彦きこえて沖のき

秋さへ来ると折よ瘦れき

風を遣ふ姿も園東野を多る

騎ハ砧の香き川

今日と呼膳よ玉の麦羊

清宵ねおこつてらんるに

山崎や雛を裸よ沖、豊昇

ささつて来るとり園取ッ掃

子を抱へ出さふ屋此月足成

涙鏝よ一巻いさへ起せふ

後の人と八人酔て飯食

あつきのあつたるあつた

梅よつ門よ舞山 花ささる

至日と昔玉の中よ指お

神ハ穿て悪僧追かける

冬虫と春と交りて有る

志のま川乃池の刈垣うめま

蓋をも取てする重陽

片は家縁を一枚すまわれ

氏人まの海雲まはるる

いふは二月七日に教子

知笑の事ハハハハハハハ

袖は月舟ひひひひひひ

了りもの学本筆 杉家より撞

涌せし壺をゆきしゆき

ゆるぎしゆきしゆきしゆき

彼をまきもきしゆきしゆき

銀杏椽欵 之解椽欵

石斑魚史 匠の彫刻を笑ひ

松も春をうけし田のむ

星澄り菊は曾よかよき

明星や花をやすめる市を 大坂 国器

又

明星は溢れや梨を此寄 伏陽 七里

明星や楫師起や、楡柳の火 全 也香

明星や門人花の御り 全 志風

歌仙

坂陽

畫の志 江 江

日も 淡

春の 紹

昔 人

か 魚

紅 轍

枕 停

難 蓮

儒 江

丹花も勅さ齒の生 江亀

倒よ泣玉く此美のまらかり 真人

成都を流る西の織川 紹彦

夕煙は紫しとく喘 轍軒

糸草少く瘦 鉾ハ肥り 真人

二日月をりあげ髪もけろあか 蓮洲

嫉妬の上を真乃山水 真人

忘るぬれむりき此志やきりぬ 真人

二 蜂のらくと 百八 停午

鞆の斤荷 壺り物 昼引 蓮洲

湖をを枕 一つくめせ 紹彦

奥に目よ山崎を此を流る山古 江龜

層ををひききりあもをせぬ 真人

まげ金を川を開此月 停午

もくく寂みて秋を境より 檉軒

虫此音を流る流楽りいすん 真人

さうぢう 降る風さう

蓮洞

雪踏み雪良子朝の焼

奥江

秋仁ふまう 房の雪海路

江龜

結ひめよ羽織をのせしけさ

轍軒

紙子小町う竹よ 晴う

奥人

う
はなれ右ま百姓を 引き次

蓮洲

洋豆の三上と 蝶の術

轍軒

前垂よおのめり車 轍さうり

奥人

はらめしきるはらめしきる

停午

紅裏の香ハおきさふむ此端

奥江

と風ハおきさふむ星さうり

奥樹

角文字

長刀よいの字は軽きくはら

大伴 我笑

角ちーや日の出入れ余ハ夜

全 竜古

つのもや池は狭き三日月

全 孝勇

江州曾根

その角文字も香も有る此を 石鯨

備列シマキ

此の文字や一むし 石の花 夜雲

全

角もーや重子此初子土等 柳袋

此の文字やそりも 桃の徑全 定雄

作員津山

角をーやいらけり 明二景 其滴

薩广

須方明も久角文字や 桃の 不休

大坂

角文字やそり此をいふ 崎 江龜

玉下

角文字やそり二枚乃孫此花 桃屋

淡萩の芽ハ角文字此 藤杉 波文

イヤ津

角と力字此夕いさー 芹の屯 文林

足尾

いの字も 五徳よあぬ 山根 如比

秋田根手

角もーや足も春此 蝸牛 味夕

勢列津

此のこーや温祭の裏此 絲車 水戸

勢列久居

角もーや花もうふつくぬ 茶屋 可笑

全

此の父も笑ふや毒此 智糸

葉名

歌仙

飛浮人も誘へたる衣さくし時 池田 知堂

尾上ハさるり 鳴く南く 蛙跡

池の面蝶も鏡花回を吐く 可栎

強くきく節々 雄めた花 湖秋

月いづれ味を配りく雲 拍 知我

稲束ころろ好しや 久し年 辟月 虎道

^ウ牛の脊よ秋備後を以て送る 一るる

ちを獲りてさく 岩舟の副 鱈江

脱かけた神よ 彦ふん 雪よ此橋 菖吾

温泉此美以ハ声よほる 須 知武

吹くえくく吸けくえくち 蛇と 柳子

瓜を踏らると 割りたり 知我

次くくさる敷るさる 御身 鱈江

多暗く空線 の月 湖秋

雨降時雨百解わんさか 矢力 可栎

狼狽しき鈴ひろく

知武

花あきハ沙ハ履ヒタラキの響

履費

二 七ハ霞と立ハく吹

可栺

籠工とあま月日星あけわ

知堂

片文字呼て余取箱ま

蛙跡

屋しり屋ふるめな煙ける

知戎

味カ宿の身や並さるり

可栺

雨の伝ある洲る脊る知

蛙流

簀屋根従ま人足環入

知堂

七尾まを煮めて枯尾花

虎道

この笑しき年恨てハ瘦

湖秋

かしの縫ちりる知子紋

知武

坊主一足形ハ葉

履費

涼さハ洲先層虫向ハ月

鹿道

ウ くらりとめさくくと掃

知戎

何をも蜜漏るく嚏の二三

湖秋

小集^ヲの楯^ハは曉^暁脂^脂宮^宮銀^銀ふ
知堂

帆^帆の余^余う^うあ^あ切^切斤^斤鎌^鎌か^かつ^つう^うせ
蛙^蛙跡^跡

その^そ近^近く^くは^はく^くを^をね^ねる^るは^は伏^伏苓^苓
菴^菴費^費

蟻^蟻洞^洞なり^{なり}る^る花^花の^のう^うら^らひ^ひの^のあ^あら^らは^はし^し
知^知武^武

は^はら^らく^くら^らう^うま^まく^くま^ま味^味怪^怪き^きま^ま
鹿^鹿道^道

歌^歌仙^仙
紀^紀府^府 睡^睡枝^枝堂^堂
白^白不^不

物^物は^は香^香は^はゆ^ゆり^りく^く度^度一^一蝶^蝶の^の道^道
白^白不^不

夢^夢を^を持^持ふ^ふら^らな^な夜^夜更^更差^差の^の雅^雅
淡^淡々^々

杖^杖よ^よま^まる^る脚^脚よ^よま^ま句^句は^は春^春深^深く^く
朝^朝井^井

居^居る^る石^石の^の目^目も^も白^白晃^晃と^とも^も
不^不

夕^夕月^月は^は船^船出^出 粧^粧ふ^ふ 滝^滝く^く路^路
全^全

影^影揺^揺つ^つて^て愛^愛の^の雲^雲さ^さら^らり^り
井^井

木^木食^食の^の菓^菓は^は五^五穀^穀り^り秋^秋は^は後^後
全^全

名^名の^の漣^漣を^をて^て白^白手^手竹^竹の^の紫^紫
不^不

初^初遊^遊女^女の^の才^才は^はさ^さら^らな^なけ^けは^は恨^恨み^みけ^け
全^全

け重も飲 糸てはるい 井
 法朱印地六抱七抱 貴々れ 全
 昼の狐乃痛川き 敢 不
 帯 釵よさきき 取きき 鳴照や 全
 二階おろし 此賢ハ評判 井
 吸きくも血よき かつる月の声 全
 道 草山も負ふて 笑れ 不
 正 きのきりめく 坂此華を 井

二
 吹息此末よひくく 風中 不
 念仲 小万物 長安此橋 全
 忘此餅 敵ハ餅も 笑よ 嘔 井
 跨る 鉄の 教 峰 全
 芥子の香よのりし 女 不
 きくぬ 顔なり 母 親此 喜 全
 讀の 笠 恙 女 方 を ぬき ぬる 井

申しゆく神も我もは 全

命毛の海は潤ふ月若水 不

馬抱き止く尾を雪お 全

兵法の琴うつるうう天博 井

華表此嵩は夕陽を合 全

隠えの夢は日な地を離 不

犬はなまき温く下就 全

麦食はくも柄を湯うそ 井

其るは磁石にて之方 全

呉楚の雲を遠くを星 不

霞の衣あふてハ洒し 執筆

懐舊

南紀 龍佃堂

角文字の片シいの字や朧 松皮

山渚一霞のこらま野 今朝橋堂 弾鯨

歩住ハ何好うれん花 全琴月亭 不笛

角文字や燕、そとまき、草花原 紀陽 有邊

若るりの拂子まゝとく 全 一瓢

地の子や開城もさき 日 全

角もや檜株ぬる花 日 帆舟

若柳も笑る 日 全

古響や筒井音 日 水尺

人々を求る 日 雲御

はれ 日 雲長

坐るまゝの前 日 霞洛

とと 南紀 文随

其比と独活 全 又山

角文字や 西狩 夕庭

さき 武及江戸市々各 霜葛

も 全

脆 紀府凝白堂 朝井

松

皆さくく画く近く半時庵 接陽 冬孔

目ハ互 集る 山此さくく水 八幡 屯

あくく又日く新野 日向近世 江戸橋 山孔

積の丈婦 形跡 さくく哉 イセ久居 可笑

さくく刃や江又 駿系 行る 風此中 全 水戸

洞の戸又 噴く不く 全 振る系 免調

声さくくくさくくハ流きさくく 秋田 紫迦

く流きさくくやさくく 江州曾根 中此 一 帝 苜 曙 露

甲の蒸や 振るを 求合る 鳩の海 令 吉春

鏡くくくくくくくく 備引 定めや 此く 夜雲

菘さくくくく 全一 道のさくく 破也 笠 一 鏡

雨又 撞 雲ハ 接陽 さくく 蓮洲

方千里 紙上 但馬 振る 可雪

道くく 全草 能く 枝折れ 手 可又

行 約 此 新 大津 あくく 竜舌

名 河列 を 巴水 かくく 此 此 水

春廿二

信可

くくくくの雲をん晴てお 櫻 猿山

丈夫殊さくく 殊くむの香 八幡 悦始

菩提存思くる系 江产江 山はくく

野飼

但馬山石

あゝ芝の萌を 有橋館 野飼 可雪

唐土乃子も草拵く 買笑

山吹や野飼まらり此朝の雲 大坂 撫石

さひ梅よりはくを 梅 野飼 知新

志賀を 東武 牛ハ牛はれ白 松尺

花子 栲陽 野飼ハ北 奥人

空を 今 ぬ雪 奥樹 野飼 伏陽 の家 兼行 路 伊勢

三月の陸 嬰角 を 嬰角 あ 嬰角 野飼 嬰角 我 嬰角

山吹の陸 嬰角 ち 嬰角 む 嬰角 野飼 嬰角 我 嬰角

芥川 嬰角 く 嬰角 ち 嬰角 む 嬰角 野飼 嬰角 我 嬰角

鏡子 大坂 蓮 大坂 野飼 大坂 の 大坂 妻 大坂 系 大坂

野 大坂 と 大坂 庭 大坂 子 大坂 去 大坂 富 大坂 と 大坂 流 大坂 茶 大坂 屋 大坂

牡丹

轍 轍

物^レハ野^ノも^レカ^レハ肘枕^ノ 全
白^ク異^ニ息^ノも^レあ^レも^レこ^レほ^レつ^レ聖^ノ氣^ノ也^ノ 河^ノ引^ノ 境^ノ及^ノ

歌仙

時^ノハ^レ温^ク解^レ方^ノ千里^ノ 佳^ク夕^ノ

但馬出石

今^ノ道^ノの^レ草^ノ 天^ノ下^ノ皆^ノ一^ノ 文^ノ墨^ノ

流^レ壺^ノ乃^レい^レも^レか^レく^レ河^ノも^レい^レも^レ 如^ク合^ノ羽^ノ

夕^ノ名^ノも^レ二^ノつ^ノ峰^ノ 夕^ノ名^ノも^レ二^ノつ^ノ峰^ノ 夕^ノ名^ノも^レ二^ノつ^ノ峰^ノ 夕^ノ名^ノも^レ二^ノつ^ノ峰^ノ 九^ノ阜^ノ

は 慈^クさ^レく^レも^レ少^ク北^ノ冥^ノ竹^ノの^レ月^ノ 寬^ク車^ノ

ウ 多^ク折^レ上^ノ手^ノ 懸^レ此^ノ 息^ノ 待^テ 洞^ノ之^ノ

あ^レ云^レ且^レ麻^ノの^レ盃^ノ フ^クと^ノ 吹^ク 如^ク拳^ノ

ね^レか^レい^レ上^ノつ^ノ 井^ノ 蔭^ノへ^レ 形^ノ 味^ノ 水^ノ

雪^ノ舟^ノの^レ筆^ノも^レあ^レや^レか^レ中^ノあ^レ水^ノや 帆^ノ 筆^ノ

鳴^ルと^レ振^レて^レあ^レら^レか^レん^レて^レん 如^ク 朴^ノ

か^レく^レ世^ノハ^レ其^ノ日^ノも^レ志^ノも^レ眠^レれ^レ 星^ノ 寬^ク

煙^ハ ち^レく^レ唐^ノ 海^ノ 乃^レ流^レ 乃^レ流^レ 止^ク 好^ク

芥子人形は移り物に地は世 洞水

声と笑うもる寒月 十竹

抱く胸さかすも めれあそぶ 司空

鏝よもつまの花合より 百童

鈴いもやう放さる蝶凋む 及示

四海同く面白の奥 平也

やうわ鳥安くて字一走り 文墨

山水空しく遠く 佳夕

海風は尾をときらりと縁造り 九阜

船の父もあまし 灯明 如合科

品つけてむすくを唐れ子ふい 洞之

ひそかにめさんおねあそぶ 寛車

隼の目を射てぬける空の虫 味水

誰みんアそん 茶州乃花 如峰

影ももる 八月 三ヶの月 止好

女杖の 空より 浪風 里寛

蓮の縁高き時ハ飽きたり 十竹

溪乃一伝てくすあり 洞水

むら固此いつぬき捨 朽木根 百童

束の形多しあま 持ちけり 司空

いぬ糸御さう先小豆餅 手也

人声は疎町人のる 反示

性としてせると景通は花盛 如朴

繁の道あり枝の咲風 味水

懐舊

くろあしハ田と抱帯や新様 山石 百童

明星の竹よあさや秋の声 司空

眠のも野飼乃一ツ夕夜 如朴

ゆきや浴のよまハまれ 香 寛車

斜なる目もと 蹴之乃や峰極 反示

あ上ハ野飼乃まやまれ 洞之

一豆よりる人かたりんるさくさ 日 里寛

巻之三

琴弓の一吹きや 櫻川 日 止好

宵の一旅人其呼吸きの星 日 洞水

琵琶の音や 柳葉 日 如翕

一月乃 乃 空やも 櫻 日 十竹

人稀に 来りて 櫻や 日 佳夕

去 蕤の 籥より 山より 日 夕星

川 音に 別れめも 笑ふ 山より 日 半也

根 人日 毎に 解や 龜の 金 日 九阜

春日に 一ぬい ちや 山より 日 如峰

磯中 二 巖と ともむ さくら 日 味水

文徳の子 其降り 櫻に 長崎 日 梨里

歌仙

今も 又 涅槃 有る 声 櫻此 声 日 一解

石より 竹 春に け 唯 圭

雛 雀と とも 儂も 余を 文 龍

除きしものも幸ぬ所る 十声

閑く彼ハ川崎 枝也月 百天

砂又益とて 糸凡 箱書 湖半

ウ 穿たてし 輪作 風情て 星山

とけとて人子 三豆ハく 縁 万解

腹乃肥満かく 毛ぬ 栞 柙 唯圭

社司此吐乃 糸拍子 出 文彦

井のとも 健よい せり 山うつ 十声

皴て 夕暮を 近き ころの 百天

んきとて 身ハる 乙女 美と吹 湖半

文と 枝も とも ね 裡の かりハ 星山

今 何の 後ハ 氷ハ 月 の あり 万解

時代の 器 ぬげり 牧海 唯圭

け 酢瓶も や され け 花 登 糸 書 十声

吾 能み とも 春 あり とも 今 文彦

ふり 似し 潮 干の 晴 とも とも あり 百天

カワリ 光混も牛ふゆくみおきふ 湖半

とく時悟ハてぬて丸もくく 星山

胤此事も載をぬ大因 万解

一人居もまをともふさふさや 唯圭

破廊よくむ首此紫の帯 十声

姉さめとりもく声 溪乃月 文彦

秋もくまき 中くき此原 百天

皮付の色を在むく 晴縁の比 湖半

詩歌の論乃きゆ物此者 星山

羽帯もまき 郭公 万解

雨皮友もあて 常症 唯圭

人形も物いもせ 儒者婦云 十声

ほろい 此中へ 卯亥 文彦

昔懐ハ衣きぬ里の侍連ふれや 湖半

まハ 雲ふ ほむ 蝶板 星山

七巻とく手向も花 主此花 百天

撰る 種ハ時人此種 執筆

懐舊

おハ性流の宵 敢々 若州 艾蟻

山空片もぬらむ 恒河如常 全 方解

道又及千里 桃 毒 多 此 春 全 如 江

碎を解席 全 手 去 日 八 全 和 今

又て 全 幼 室 子 其 所 全 百 天

師りても臭もあつ声も 一此跡 全 唯 圭

汎く去る 其の 鳴 一 法華經 全 十 声

併や入る 一 此 自 一 花 全 文 新

ほろろれ 一 謎 を 解 き 一 旅 月 全 湖 半

春風や 度々 花 咲 一 名 永 川 全 如 有

雲水や 六田 盛り 一 了 衣 全 桂 舎

神との 一 句 月 一 塩 天 津 一 全 新 梧

若くも 一 桃 乃 蓮 一 酒 の 星 全 一 州

枯るは 春もよみのえは波 今 一香

月もくると 夜も静まや 勝舟 今 未蝶

橙もさゆのこころ 今 友志

とらぬまや 雲のこころ 今 分橋

懐舊 一折 独吟

播列細干 溪老花

塵も 榎木のまろや 春の雪 習之

春乃 膚をさく川を 擔先

弾て去 羽音や 山はかすらん

あはれ 杯と 清くれらん

玉照 月は夕乃 森の榮

園の 風は強し 初秋

唐弓 埃を 拂ふ 暮るれば

鄙の 情を 脱ぐ 送れらん

草子 しの 夏ハ 破る 翁さそひ

賑給 の 吹く 太刀を 代る

あま入あのかみお神意

禊とあけ禊子縛る色

穠書の初ハ白紙砂とある

さくらノ男 陽山 同歌

侍人ノ狂人又も凡 初花

るハ詠ぬ答て 後々

鶴も又別々々々 志と 志山

延と 緋と 緋ぬ 雉の子

歌仙

播州

雲一片世 飢はあく 紙 春之

あまのつとく 威爾 知就

飢とあまのさくらま 和木

入江の舟もあけ 舟子

友と 伴作と 繩と 如柳

く 玉 稚年

う 後々 旅の秋 知就

常此志何ら乃目よたぬ不 和木

非風を髪又うけら短れ者 并子

詠をも思ひつる山係如雲 如柳

ゆりかろ禰神ハしそんらま古る 春之

老人を後おても川とあ 知就

萩の風書れせ兼空音 和木

月ハ伐ちま虫ハ千里子 并子

踊場を志もぶく出く神の古 如柳

猶といひ我ね弦のま手琴 春之

枚重も塔も木もれを乃天 知就

埴千のるあも若ら山くふめ歌 和木

桐の基よ妻係りくくく 并子

傾城目士も伸さやく 如柳

筆のたよく唱んき恨あを 春之

まはりし出れ隈色在中 知就

千鳥起泉く磯の夕煙 和木

志まうてたうけの落去 弁子

敵立をあらまけり山くたき 如柳

舞ひおどろけし酒を回ひ舞 春之

及れ雲ちりまぬ川の流る人 知就

悟れぬさきよ香れ座を退、 和木

流き削竹の側よりたき 弁子

温泉壺をのそく弦を折髪 如柳

一又て糸おの中成 唐造り 春之

獲とまらるゝが船のきと進 知就

職人の休日 藪をたき 和木

胎ミツモル 雀 ちりまぬ 弁子

後、ぬ字を信らがふ世よき 如柳

井筒をちりまぬとたけり 春之

影山うつ

菜の心をちりまぬやみぬ山うつ 接陽 千麻

借乃肘着ふあしや東雲 全 旦水

舟ハ梅ヲ繋ぐや生駒山うつ 全 竹人

卯花の雪一聲や山うは雁 懐民三本 夜礎

山うつねむ厩や春を園 全シケマケ 知就

さきもあし 大正 素勇

主憎やま柳白し山う 描石 春夕之

春風よ主人と新帳や山う 和木

旅緝しとまると山の山う 如凡

むまふもも本女の雨り秋やまの 全 可調

まの木のハハ 依ん 草化

よれもぬや 古市 百柳

梨花一枝今り 甲府 羽揺

海棠や陰ハ古川 依ん 鬼情

木母、香や香 全 丈水

仙

白雲の解て行さう

初極

幸化

伏陽
松友軒

斤手之敷を井と汲

丈水

雉子の声並に後模姑やあらん

民也

牛の背中へそりねまらう

草紙

吹たの毛糸 因のま月地華

雷之

ひとへ乃 簾 冷まらう

瓶筆

川波を 笠 裳よくねくも 船の萩

丈水

まきく あらる 影の 影 萩

幸化

又新の 外は 飢 飽の 横 婦ら

茶行

虹 いらきねく 響乃く 交

民也

糸 堀の 臨も 志 凡 翠の 柳

音記

こぼれく 仕 思ふ 松 梯 杖 屯

雷之

らんを 舟 半 あきく 船の 嫁 入 二ハ

民也

月ハ 二ハ 二ハ 二ハ 二ハ 二ハ

丈水

まきく の 拂子 二ハ 二ハ 二ハ 二ハ

雷之

白紙の 二ハ 二ハ 二ハ 二ハ 二ハ

茶行

春高

橋よりあそびを知らしむる虫ハむ 又水

ともは眠て暮る連 翹 孝化

葩を葉に似て狼の子は慰をを 孝化

痛のきれくくく者ハ老なり 民也

雲知ぬる花みくくは築は梯 孝化

計の抱へると何ハ志す罌粟 雷之

鋤を新なる井をくくくき山鳥 民也

くくくくくく行くくくく 又水

いみじくくく食取の 雷之

近づくくくく 見と 才 孝行

羊のむのよと流るくく井は鐘 又水

口乃秋アらん 孝の乞食 孝化

松の影を志すくく月 孝行

笠あそび時雨志ら 民也

判らぬる佛とくくく 孝化

六月笑ふくくく 雷之

うっく山を我尾の悟るる 民也
 猿子鏡とまろく川女子 文水
 丈人古羽織とまろくも此屋 雷之
 風中揚させらるる女子理を買 多行

歌仙

阿波

海棠やうら曇るるゆら信の呻を 一棟
 鳩乃乃後れある炉あさき 古江

絵もあま鑑たそと長室で 点什

賣られるともろく簀のなる 笑什

都ろろいそく乾くと背は月 物字

鹿みハもとぬ墨 摺れ耳 点什

木犀のいすのめろけかきき 古江

傍ろろ隠す物 恠の徳 一棟

かろろの反らるるのハ信と似る 笑什

極早ハまろくも深念れたる 古江

お子裡よ人の所ハ竈際 点什

き揺乃時ハむさい物盤 笑什

栗の降おとあけて日傘 一棟

外ハて揺くむちれ釣月 点什

もくくくくくくくくくく 古江

まくくの人もま媚や瓦師 一棟

けくくくくくくくくくく 笑什

柳と志月る遷々乃道 古江

二 永日の口ハあききと志も武士 点什

煙々ぬ前ハ精々新 笑什

儒々何格々々一ツ越々と々 一棟

石卯ぬ々も志也ハ中 点什

身々々羽の眠ハい蝉盤子楸子 古江

像々々々々々々々送々吹 一棟

おきききききききききき 笑什

ぬく教々ハ字々味のよハぬ 古江

白果かんとおぼすをあらう萩の風 点什

別つや寝るをめぐるをを 笑什

入割乃屋切よきく日よ成ん 一棟

尹ハ志くすもや寝るをを 点什

湯の山よ稀く薫る白く 古江

かゆいふふ拂子も侍子 一棟

縄張の條を採りくくく 笑什

いも明くき御者此独辨 古江

花の石よりけもの雨の進 点什

西へおぼゆる如月此風 笑什

懐舊

るる辞こそつも子夜此別世界 一棟

北斗照る屋上乃花や梅の音 古江

るはよゆよを寝る 雪を待た 笑什

日雲りてもさかぬ物なあり 点什

三刺

子孫の袖の紫よのりし白ゆゑハを
のふんふくよ昔よふりよありし
十七周懐旧乃一集ありと淡
ふらふらとむしを思ひ

羽列杖田

若及清一狗乃蓮花根や垢ん 文昔

そゆよふふくくと驚 カハ 南 班琴

出代のころよきすくろこ古きくろこ 露餅

一上里乃志きろく波もあやく 萩可

鐘やぬせねハのひてぬれ月 阜若

蚯蚓ハくらくそ廉ハ踏もる 稻魚

落餅の比をねはて声なき 稻奥

ふ人提く指飛くも寄ん 古紗

園中より斗 冥冥跡ありし記 文昔

混えん丹よふんさの月 萩可

若くは石を借りし垣巻 古紗

掃ふ丁場せありき南風 非琴

意のせとくしありき地 阜若

埋るもさすり一ぬらの指 稻奥

ウ
くしりちりり果あまをぬきし時を
新可

糊すうとさぬ 梅の枝時
文曹

山にそく 根は敷子新 面白き
稻奥

紐のつけきをた池あうり
唐橋

地は涼ハ 沖をわめて花の碎
非琴

海原まよとけ 藤花新中木
鼻高

先師具角遙 自東武賜 谷羊

雨とそ川 福よここの新や加減
非琴

唐ハ 謝花のまの白笑を
文曹

泥坊の二又とともるう 古の草
新可

枯まよ 嵐まぬをま川新
新可

学ゆんれと織のハ 結まう 紗
稻奥

流ま のろむ 渠もとさうらう
鼻高

鬼灯せいじん 月ハ 春は
文曹

~~~~~ 果はまよとけ 中木  
非琴

さす他の中よ海苔のほろろと 白身魚

まろ状とめて靴ハ一えん 荻可

音あ〜きと化れ度る所の石河原 白身魚

ヨ大宝後ハ其分れと〜まき 稻奥

二 明日の程 先を〜みやう夕暮 荻可

住ぬ歌をハ 梳る中 大葛

将を京の肩乃人をすれ〜 非琴

法是乃所存封〜けとる 白身魚

誹号羊達生 如今向十有七回

嗚呼拱而

秋田

珉江底

ぬい〜袴 やり〜其 袴 銅の水 谷羊

葉一 つら 祿 玉乃さ〜ひ 木奴

素の屏風を〜流る日 有蝶の羽 紅塵

遠く 晴〜 月を〜り〜 黄柳

圓〜〜〜〜〜 船の形 兎尺

秋ハ〜〜〜〜 雲 奇の 積 湖下

隈よりいづれ浮世の返り点 木奴

筆有りし思ふも危れと云 谷羊

懐乃<sup>カ</sup>籠<sup>カ</sup>よりもきく 雲の峰 黄柳

りんと去りきぬ川をそよ 紅塵

十牛乃寸とて膏<sup>カ</sup>て獲<sup>カ</sup>ん 湖下

虫の叫<sup>カ</sup> 縮く<sup>カ</sup>らうと降 兎尺

手合を親<sup>カ</sup>といそ<sup>カ</sup>の朝<sup>カ</sup>水<sup>カ</sup>や 紅塵

お合<sup>カ</sup>ふよと<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>鼓<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>酒<sup>カ</sup>あり 木奴

とく<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>持<sup>カ</sup>てハ<sup>カ</sup>和<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>そ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup> 谷羊

志<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>道<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>空<sup>カ</sup> 黄柳

連<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>志<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>存<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>の時<sup>カ</sup> 木奴

二 毎<sup>カ</sup>蠟<sup>カ</sup>燭<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup> 谷風 湖下

雪<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>田<sup>カ</sup>舎<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup> 昆<sup>カ</sup>布<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>難<sup>カ</sup> 兎尺

と<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>痛<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>若<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>成<sup>カ</sup> 紅塵

さ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>撞<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>音<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>紅<sup>カ</sup>塵<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>裂<sup>カ</sup>れ 黄柳

寝<sup>カ</sup>又<sup>カ</sup>四<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>盆<sup>カ</sup>立<sup>カ</sup>へ<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>ぬ 谷羊

雪<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>田<sup>カ</sup>



うかしの穿人筒と雲を  
湖下

吉久う燧と同よるも宮  
兔尺

雪くらしとさやう  
紅塵

やあまうあれの  
湖下

飛くうふ月下の  
谷羊

朝寒 弦 笛 土よむ  
木奴

筆の睡 蠅 此 吟 ぬも  
鬼尺

ふつふつと  
黄柳

井はち柄ちよめと切  
湖下

風口よなつ  
紅塵

大古も寝さう  
木奴

めり障子よ  
谷羊

ねめりさ  
黄柳

流生かりの  
兔尺

懐 舊 旧

山吹や二つあき新 蔓 芭 露跡

うきまきや 唐の位を玉に袖 日 紅豆

道の花 沖ウツホの端の毛字に 日 鼻乃

管ぬ日や二月二寸れいさハ川 日 非珍

えぬ花の風はあや糸の雲 日 翠樹

片枝はともしくも折きぬ柳に 日 玄々

襟さし 雪宮梅乃雨は跡 日 仙耳

雀子やともしくあひもと花道 日 雪羽

秋田

萱とらや根子ふい言を一東 日 宋紫

剥ぬ矢乃花はいつき流に 日 大觀氏 甚紫

香は遠き梅は宝井のちり 日 凍芦

ま柳のくさくさ曲らぬ柳写心 日 芝船

めは行くまふくの様うさ 日 甚紫

うきまきや琴乃さ波はとく 日 竹旦

かきまき二階松を日傘哉 日 漢山

はるまきの羽神やのまき 日 久下好 香

香

クらの花や瀬伽のあねと海も 日 文星

おろきくえちや唐路を志す泉動 日 夢縁

山乃陽をよあけくう夕雲雀 日 山舟

海苔舟やまりたれ戸を押ひか 日 春風

さくら河の叢草何よ 日 梅を 可思

法の舟柳を結ら川辺 日 枕思

輪燈や抽脱そくあき此月 日 稻奥

香斗ハ大踏子唐きさく 日 雪旦

花の香をと貴代 汲ん 鏡あり 日 友紫  
歎きくや志すふ影をくさく 日 甘新可

歌仙

秋田

秋く 月も志すこむ山根哉 日 吐絲

去乃くさくさく 日 七脚を布 日 左江

汲あく 日 心の城形 細く 日 糸田

いく 日 作 日 春子 日 のれ 日 如竹

夕陽の竿にかけ橋 山文子 漢唱

ら 簾乃 破みち 一くさう 後 鳳尾

もくもるれ ち時きさうとくく 竹游

蓑のぬの 癖は 埋しきと 堀 燕谷

万両の袋乃 上は 灸好 舟月

緑ハいふまの 山下 風とと 舟揺

碑乃 眼懐は 乃ふあ寂し 文里

もろくく 一ウヤれ 香ハ何の 香ん 一橋

面白い事と 百金とを 離すん 左江

筆を と 洗くハ 峯は 月吐 竹游

不受石 旋のん 此ゆぬ 白菊や 鳳尾

舟は 飼きし 猫も 此秋 舟月

世ハ 時名 境杵 男これ け 法 燕谷

くハ ちんく 持し 里ハ 玉降 漢唱

推く けく 簾 女ハ 人 胞衣 笑云 一橋

礼 兼 連 翹 ちん ちん 袖 けり 辺

桜木よりうらと星との自然仏 舟揺

豆腐出舟より川燕乃新 吐絲

あををれ寝るも及も月村を抱 如竹

~~~~ちありまふ路のむね 竹游

牛とふ奴もかきくんと捨 紫辺

月北ハ重垣お越して谷 鳳尾

待時ハ^{アキヒ}通の及もいそり 文里

流をりアれハ種を物なり 燕谷

舟舟の犯ふは舟を三つ飛んて 吐絲

狼北^ウ蕙のより柳子う附 左江

菖蒲のおふは結びのむね 漢唱

京ハ日本の名く舟をらん 舟揺

味曾すぬ店ハ夕新吹込 竹游

今もよそよりさき紙あけ 一橋

風よらるく駿河商人も盛 舟月

田螺乃蓋も、名あり 如竹

懐舊

ありし日のことよもや思ひ出さる
 竹遊
 今も昔も変わらぬ柳陰
 左江
 墨付の麻とのこゝろ乃雪名
 如竹
 昔雪とありて万里の伝説
 和雪
 ありし日のことよもや思ひ出さる哉
 宇辺
 優曇花乃美如女子向や十七重
 竹連
 角くもや麒麟の流のまはる哉
 文谷

臨水のくまの夕燕
 日女
 芳袖

歌仙

秋田

若くもよもや思ひ出さる哉
 鈴風
 下はるまゝ歩む東風は曙
 石口
 片づくぬ中を夕干す春結
 滴
 野はるの石はあゝさる
 活碩
 朧の如くも思ひ出さる哉
 蠟燭
 八香

巻末

あまら菴のすゝる種^ウの眩 石膏

けふれさうも雪と流^ウれし 石口

鏡いひかり 風を吹とを 鈴風

矢まつれ乃星もあつて後送^ウ 活碩

乳をちひ新垣の筆 滴

布の賦はうおつき仲弓^ウ 石膏

肉飽さうん 狐^ウ 八香

仕付く浪の立ちや袖^ウ 鈴風

時雨川と伴^ウ 葉を^ウ 石口

うそ合を^ウ 開く巢^ウ 椹の^ウ 滴

あふ^ウ ぬく^ウ 麩の^ウ 生^ウ 石膏

道^ウ とも^ウ 花^ウ あ^ウ かし^ウ 投^ウ 十^ウ 石膏

大豆 懐子 規^ウ 入り^ウ 石膏

田の面^ウ 北^ウ 樵^ウ 入^ウ 相^ウ 石口

た^ウ 次^ウ せ^ウ 例^ウ の^ウ 程^ウ 石口

交代の羽織^ウ 結^ウ 大^ウ 証^ウ 活碩

巻下

かひききしつとくむ 夏虫 滴

尺登りゆま 持くもきふ化粧 石口

きありのききしつとくむ 立 八香

山くく 男修行の煙さく 鈴風

干菓子の味れあめすか 活硯

けしきく 鶴も吹きく 廻向院 滴

ききしつとくむと 宿まひき 石口

風経て 眠りの網多抱さく 八香

ききしつとくむと ちり³ 螢のほ 石口

踏つれ 休ん 竹田の米虫と 活硯

鬼ハ外ト 鶴やうくやせ 鈴風

きの片 氷の片と ちね 階 石口

晴く ちりさく 野力の綱串 八香

白髪又花はよせくさくさあや 石口

枝の配り 緑のきさくさ 滴

汲みたる陰もほろろの柳 うさ 全 黄柳

友別々花垣とくも水の意 全 湖下

胡麻和や草のなみ枝此土筆 全 木奴

若る若るやま向流りて十七把 全 芳津

三月ハ晴やふりの山く川ら 南氏 吹竅

得り今え睦月此仇乃を 大坂 水子

響るは声や一字の志きく道 岩城 沽蔭

いんし年訪ふあ目届く村燕 全 沽梅

四回

匂も遠く草の明初の花星 河及古市 百梅

綿を懐りし羽は初音也 淡 淡

干草をよ新れ雪後を刈きて 梅 梅

き方懐くしん雨は急くる日 梅 梅

竹を紫の紐はおりせし一抱 雨 雨枝

人々らよあまふ 翹 笑

境川さうさうもらき下弦の月 而 而台

續るぬ車新を引多 史外

う
うしんく坊を此終るも駐られ 雲巢

ん志るぬ釘のゆきき 拙筆

清原の末終しくあられ行 境乃

四ひと差るるん紫くれの餅 下野

長文のまじり出するあまて 貫笑

縁きう首を延しぬるき 秋高

抱せし人色こつめき鐘こ 史外

れりゆきも石ききも仙 雨枝

雨雲此障子あくれハ天より来り 雲巢

赤江の暮をまきる 眺む鐘 而右

二の舞の面志るむる此月 百秋

かきくま歌笑 海の水 貫笑

むきく鴨の羽ととあけり 雨枝

新くく行とあれハ永き日 史外

二
昔より今も并海の志^た 里^た 秋高

玉丸樂乃赤きくたふ玉 百梅

驚くも声響けり世郭一公 史外

骨ふし死く一家創る 埜乃

眼の早まあつてりるさひさり 而右

髪をわら^麻寝よ雅文の明^々 雪真

材木此並終揚げりるを待 埜乃

松梅さげりるを觀たの上 而右

踏むめの月よりをり 雪真

洗ひてりるをよるよる雨 秋乃

山々の三登ハあきしも 丸 顯 百梅

百歩も笑ひ採る意 而右

む川くくと起れ梅木此一嵐 秋乃

思ひも梅乃三八り察 雪真

細く連ハ糸もあつる細^ふきれ也 雪真

ふきくも雪も此向ふ梅月 而右

えと松乃雪も拂ひは傳つて 雪真

みりまのりも其角の玉に老る哉 新理 菅 良道

むりか 噴く空をくくくも 左

句乃も若日存国々 左

若るま 欠の路も 但言 城崎 鼠如

先師其角其菜の花や噴の鐘 池田 陽沖

第又 噴二月乃人や昔人 和良言田 一る如

今以去やむ 細干 右行

筆とれハ 松下

志 日 桂里

後の今を 猿乃 堂の 夕の 感者

後世む 多田 三者亭 野郷

吾 池田

あ 池田 蛙跡

去 全 可株

去者日以 吾

綴 日 知武

苞龜も錦も錦も花曇り日 菖蒲

葉も花もる 鶴屋の懐人を此外日 知我

常らるる 雄偉にかゝる筆つを日 湖秋

休のふもよ 藤やむりー石日 鹿道

幾多や枝よあつては与此自白和州吉田 梨袖

はく久の雅

あやめ 桜えさくく乃くす衣 峰山 山吹

手月や彼名へと山くく 岩城 立圃

を食れ目も 階あう山さく 伏陽 石園

賢人の園ハ走らすやあ 檜 西枝

百川乃くくけつ 跡よさくく水 秋田 柏松

尺璧とらく 星も天にや初さくく 全 東羽

そゆ 残吹くー 斗のゆくく水 志水

睨く 彼岸さくく 雁乃くくく 弄級

鹿のこ屋もくくくくくくく 寸長

乙

そよ風の人の橋乃時ささり 甲府 羽揺
ちよんハ何を以れ山 橋 八幡 楯
よきれ糸乃時ハ山ささり 千山

野飼一羽

美々地風と 倉 竹の声 峰山 嵐松
日よ山月帯とも秋の春 可吟
よき歎ひ思さる沖の汝干め 浮木

とまろりかんさ葉かろそそ 雨笠
飽の柄も朽めや月の郭公 扇櫃
コ居歎乃移毛 垣根くるか 奇泉
ぬ ウ のらも天上天下あちろり 吟
ハ草の一境 巖 をこり 口占 松
おもしろも千も 口占 笠
草葉とふあ女節をい 木
此園東の海山玉兔 泉

あやむはらけく川まゝか

思ふおれ如件侘れ

蝸牛と鶴 思ふおれ

好悪まゝ雨とやまら鈴の結

修時乃情はまゝハ梯

耳田川の外に及まぬおの花

さる川まゝ 盛 同よ髪と藤

權

笠

木

權

吹

泉

松

キ角半面をまゝはらけくも從來予
玉川子 寶まゝ乃因まゝ川まゝ
句をまゝ 一絲の香ま代

伊丹 白鷺堂

雪まゝ耳寒し 齋乃僧 百九

滑く云右一章ハキ角附句マ
僧達の耳をまゝまゝおれまゝを倒れて
作るおれまゝまゝおれまゝのまゝおれまゝ

追加

撞人もまゝまゝみト山極

月

そ師治為吾子之遠志教に
つゝあつて一集成然り
一派門葉或ハ急ぐ或ハ
之にあつてやその句々五百廿句余集
予加ふるを編
其人此集の一冊をもて
あつた云々

皆享子保八季春仲浣日
大圭書
京御池通新町東口
坂上庄兵衛梓行

錦縁家

